

櫛触神社（くしふる神社）

櫛触神社は神社の規模としては比較的小さいが、地元の神話において非常に重要です。ここは太陽の女神。天照大神の孫である瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）が、女神によって、他の神々と一緒に大地を支配するために送り込まれた場所だと言われています。瓊瓊杵尊は天照大神から授かった3つの贈り物で武装し地上に降り立ちました。3つの贈り物とは、彼女の精神を具現化した鏡、宝石、刀であり、3つとも日本の宝物となりました。瓊瓊杵尊と従者は霧の中を降り、大地に稲の茎を蒔くことで霧を払い、日本における稲作文化を誕生させました。そして現在神社があるここ、櫛触の峰の頂上に降り立ちました。彼はこの土地を価値があるものと宣言し、空まで高く、そびえ立つ柱からなる大きな宮殿を建てました。1694年に、これらの神々が降り立ったと考えられる山に、彼らへの捧げ物として神社が建てられました。これ以前、山は神々の故郷として崇拝されていたため、長い間聖域と見なされていました。瓊瓊杵尊が皇室の血筋をうまく築き上げたことは、彼のひ孫であり日本の最初の天皇、神武天皇から見て取ることができます。この神社に祀られる他の神として、タケミカヅチが挙げられるが、タケミカヅチは武道家としての強さに匹敵し、相撲の起源だとも言われています。神社の主要な聖域で見るべき装飾物としては、17世紀から18世紀の木製の複雑な彫刻があります。その中には、中国神話の登場者を思い起こさせる鳳凰や龍のモチーフが含まれます。